
思い描くあの頃へ

新城寺ハヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い描くあの頃へ

【Nコード】

N0040B

【作者名】

新城寺ハヤト

【あらすじ】

主人公アルスとミルハープは同じ村に住む幼馴染だった。しかし、アルスは六歳の時に父を越える剣士を目指すために大陸を越えて武術学校へ入学する。ミルハープとある約束を交わして。それから十年の月日が経ち、ミルハープはいつもと変わらぬ日々を送っていたが、ある人物との出会いで流されるままの人生に新たな風を送り込むことを決意する。

第0話

第0話

遠く離れた人に
想いはちゃんと届くのだろうか。
少女は時々そう思う。

離れていても
少年は少女のことを忘れずにいるだろうか。
少年の心には、今も少女の姿がある^{なか}のだろうか。

今まで日常だったものが急に日常じゃなくなったとき
少女は少年の重みに築く。

自分の気持ちは今もここにある。
一生変わることのない想い。

でも、彼は？

彼の気持ちは
今もちゃんと彼の中で再び出会うときを待っているのだろうか。
彼の想いはずっと……

第1話

〈第一章〉『日常』

第1話

「よぉーし、今日はここまで！」

体格のよい中年男が熊みたいに大きな両手を叩いて授業の終了を知らせる。

全員が体格のよい中年男の前に集合し、きちんと整列する。

「前に習え！」

全員が一斉に両腕を体の前にピシッと伸ばす。

「直れ！」

全員が一斉に伸ばした両腕を下ろす。そのスピードは人によってまちまちでめんどくさそうにだらりと下ろす者もいれば、最後までちゃんと下ろす者もいる。どうして下ろすときだけこうも差が出るんだろっ、とアルスはしばしば思っている。そういう彼の腕の下ろし方は日によって違うが、今日は後者である。よほど疲れているときはこんなところまで集中力は持たない。

「先週から言っていることだが明日は、この間の組分けチームで対抗試合をやる！皆、きちんと体のコンディションを整えておけよ！大事な場面での体調管理は剣士だけでなく、全ての職業の基本だからな！」

中年男は手も熊みたいに大きければ声も熊の咆哮のように野太い。しかもいつも大声である。聞こえないはずはないのだが、それでも中には聞こえないフリをする者がいる。そういう相手に、この熊……ではなくて中年男は顔に似合わぬ愛の折檻をする。

中年男曰く、教育者として愛の折檻は大事な生徒とのコミュニケーション

シヨンらしい。よくわからないが。大の男が『愛の』なんて気色悪いこと言つなよと言いたくなるときがある。

「うんたらかんたらなんたらかんたら……それでは解散!」

授業最後の長い話が終わり、生徒達はげんなりとしながら宿舍へと帰っていく。アルスもその波に乗って帰ろうかと思っていると、一羽の鳥がアルスの肩目がけて降りてきた。

「よう、エスパール。元気にしてたか?」

アルスはそう言つて白い鳩の頭を指先でちょんちょんと撫でる。

エスパールと呼ばれた鳩は気持ちよさそうに鳴いた。

「いつもありがとな」

アルスはエスパールの両足にしっかりと握られている手紙を優しく取ると、歩きながら文面を開いた。

「アル君へ。元気にしていますか? 私はもちろん元気です。モアも相変わらず毎日元気に村の中を走っています」

彼女の手紙の書き出しはいつもこの一文だった。

「アールス!」

「うわつと!」

背中を叩かれ、アルスは前のめりになる。エスパールも異常を感じて空中に飛び去ってしまう。

「お、いつもの手紙を読んでいたのか。毎月必ず送ってくるよな」
先ほどアルスを叩いたこの少年はゲイルと言つて、アルスがここで剣を学ぶようになったときからの友人だ。アルスと同じく六歳からここに来たゲイルは同じ学び友達というよりは、腐れ縁の幼なじみといった感じである。

「いつもの幼なじみの娘か?」

「ああ」とアルスは頷く。

「いいよなあ、毎月こんなに心配してくれて」

ゲイルは「しかも女の子に」と強調するようにぼやいた。

「あいつと俺は、決してゲイルが思っているような関係じゃないぞ」
「そうなのか? それはちよつと問題なんじゃないのかアルス君よお」

「？」

「何で？」

「せっかく身近に女の子がいるんだ。お前は俺が守ってやるみたいなことでも手紙に書いてハートをゲットしちゃえよ。じゃなきゃその娘、他の男に取られちゃうぜ」

「あいつは物かよ」

「ありえない話じゃないだろ？」

小さなため息をつきアルスは口を閉じた。ふと、空を見上げると大きな太陽がオレンジに空を染めながら一日の終わりを告げようとしていた。

（あいつは今頃どうしているのかな…）

第2話

第2話

遙か南の大陸に位置するケティットという村に少女は住んでいた。少女はこの朝が好きだった。

年中、春風のように柔らかく暖かい風を毎朝妹と浴びに行くのが少女の日課だった。

少女は胸いっぱい風を吸い込む。隣にいる彼女の妹も同じように真似をする。

「ふう……」

少女はゆっくりと息を吐き、それから金色に光る太陽をまぶしそうに見つめた。

「今日も村が何事もなく平和でありますように」

少女は深呼吸をした後に、このお祈りを必ず行う。少し高くなっているこの丘から太陽を眺めると、太陽が村をいつも守ってくれているように見えるのだ。

「お姉ちゃん、そろそろ帰らないと学校に遅刻しちゃうよ」

彼女の妹が後ろから声をかけた。少女は名残惜しそうに太陽に背を向けると「じゃ、行こうか」と妹ににっこりと微笑んだ。

「よーし、家まで競争だからね！」

彼女の妹は元気よくそう言うなり、合図もなしに勝手に丘を駆け下っていった。

「ま、待ってよー！」

少女は既に陸のふもとの辺りまで走っている妹に追いつこうと、慌てて走り出すが、慌てていたせいで、前のめりになり盛大に転んでしまう。少女は運動が苦手なのである。それが、ただ走るだけのことであっても。

「いたたた……」

少女は痛む膝を押さえながら立ち上がった。丘のふもとでは妹が手を振って何かを叫んでいた。

「今行くよお！」

少女はそれだけ叫ぶと、再び転ばないように気をつけて丘をふもとまで駆け下つていくのだった。

少女の名前はミル。

ミルハープ・エレウスはケティット村に住んでいるおっとりとした少女で、気を抜けばいつも寝ているのではないかというくらいのはほんとしている。彼女は訳あって、村の学校に通わず隣町の魔法学校に通っている。そのため、この村の子供達が学校に行く時間よりもはるかに早くに家を出なければならぬのだ。

家族がのんびりと朝食をとっているときでも、彼女は一人バタバタと家の一階と二階を往復している。

「いつてきまーす！」

ミルは玄関から家族に向かって叫ぶと、清々しい太陽の下を馬車の停留所まで走っていく。別に遅刻をするというわけではないのだが、ミルは村の清々しい朝の中を散歩をするように走っていくのが好きだった。

サワサワサワサワ。

馬車の停留所にゆつたりとした風が流れる。

（そっいえば、エスパールはもう街についたのかな）

第3話

第3話

「ふう、これでよしと」

アルスはペンを置くと、窓を開けて口笛を吹いた。これでいつもなら彼がここに来るはずだが

「エスパールが怯えてこなくなったらあいつのせいだからな…」

アルスは『あいつ』のいない部屋で一人ぼやく。

バサバサ。

鳥が羽ばたく音が聞こえた。アルスが幼い頃聞いたあの羽音に間違いがなければやってきくるのは彼のはずである。

「エスパール」

アルスがあらかじめ出していた右腕にポンッと止まったのは白くて少し体が大きめの鳩だった。エスパールは優しい目をしながら喉を鳴らしている。

「昼間はごめんな。あれでも一応俺の友達なんだよ。だから勘弁してやってくれな」

エスパールは何も言わず、首をきょとんと傾げているだけだった。夕方のことはもう気にしていないらしい。

「いつものように、ミルへの手紙を頼みたい」

アルスはそう言つと、街の百貨で買った手紙用の小さな筒に今書いた手紙を丁寧巻いて、その中に入れた。

「たっただいまー！」

あまりの馬鹿でかい声にアルスはまたエスパールが逃げ出さないように瞬時に窓を閉めた。幸い、エスパールは何とかあの奇声に耐えていたようだ。

「あれ、アルスはまだ部屋にいたのか。手紙、書けたのか？」

ああ、とアルスは頷く。

「お前も早く風呂に入ってこいよ。気持ちいいぜ」

ゲイルの体からはまだほんのりと湯気が出ていて、ツンツンとした髪型がいつも以上にツンツンとしていた。これはもう鋭利な刃物の粹だ。そういえば、ここより東の忍者学校で水をかけてついた癖っ毛を武器にした学生がいた話を聞いたことがあった。

（あれとどっこいだな）

「お前、今とてつもなく変なこと考えていたろ？」

鋭い……。ゲイルは男のくせに結構人の考えに鋭いところがあった。

「この頭で串刺しにされなくなかったら早くお前も風呂に入ってこい」

「それは拒否する」

「Why？」

「なんでつて、俺が風呂に行っている間にエスパールから手紙をふんだくつて読みそうだから」

「う、なんでわかった？」

「何年お前と友達^{ダチ}をやっていると思うんだ。今年でもう二桁だぞ。

二桁の大台だぞ？」

「体重みたいになよ……」

「というわけで俺はお前が手紙を絶対に見ない、エスパールにちょっかいを出さないという二点を守ると誓わない限り風呂にはいかん！」

「おれはおまえがふろにはいつているあいだにてがみはぜつたいにみないし、えすぱーるにもちょっかいをだしません」

「棒読み丸わかりだ」

アルスが指摘をすると、ゲイルはしぶとい奴目と言わんばかりに彼をにらみつけた。

「宣誓！某は貴殿が重湯にお浸かりになっている間にお手紙を拝見することはせず、また貴殿の親友のエスパール殿にも悪戯はいたしません！」

「古風な言い方だから信用できない。却下！」

「…お前、完全に俺で遊んでいるだろ？」

「そんなことはない。お前が……あっ！」

しまったと思ったときにはもう遅かった。ゲイルはまだ机の上に置きっぱなしにしてあった手紙を素早くひったくっていた。

「作戦成功。名づけて『俺が下手に出ていれば…作戦だ』！」

「作戦名、まんまじゃないかよ…」

アルスは悔しそうにつぶやいた。

「え…つと、何々…」

ゲイルは数秒間、アルスの書いた手紙にじつと目を通すが、やがて、あきれたようにため息をつく。

「お前これ、近況報告を書いているだけじゃねえか」

友人の一言に今度はアルスがため息をついた。

「だから嫌だったんだよ。お前に手紙を見せるの」

「確かに去年までは、否、去年までもこんな手紙では駄目だと俺は何度も指摘してきただろうが！」

「もっと愛だのLOVEだの書け！っていうお前の台詞も聞き飽きたぞ」

「うぐっ！」

「大体、何年も俺とあいつはそんな関係じゃないって言っているだろうが。あいつだって、きっとそう思っている」

「わからないぞ。お前、彼女に面と向かって聞いたのかそれ？」

聞いていないけど、とアルスは気弱に俯く。

「お前ももう十六だろ？そろそろ女の気持ちも考えてやってだな…」

「エスパー、これを頼む」

エスパーは小さな筒をしっかりと両足で掴むと、窓の外へとそのまま飛んでいった。

「あ、てめえまだ話は終わってないぞ！」

「お前の話に付き合っていたらエスパーが寝てしまう」

「鳥のことなんか知るか！」

「じゃ、俺は風呂に行ってくるから」

アルスはそそくさと入浴の準備を済ませると、さつさと部屋を出て行った。扉の向こうからゲイルの声で「覚えてやがれー！」と聞こえてくるが気にしない。

そう、気にする必要など何一つないんだ。子供の頃にした約束なんてとつくに時効だかなんだかで忘れられているに違いないんだ。

第4話

第4話

ケティットから馬車に乗って三十分ほど東に進むとノクターンという町がある。ミルはこの町のシュトレーン魔法学校に通う生徒で、成績はいつもクラス、学年どれも万年一位の好成績を収めていた。さらに自身の容姿・性格の良さも重なってシュトレーンの、いやノクターンのマドンナのような存在になっていた。

最も、のんびり屋のミルに自覚はない。

さらに特異なことに、彼女のような絵に描いた優等生といえば同姓や同じ秀才たちからの嫌がらせなどが目立つものだが、ミルハーブに関してはそんなことは一切なかった。周りからどんなに賞賛を受けようが、彼女はそれにおごることなく常に努力を続けている。そのことを周りの人間は皆知っていたからだ。

「おはよう、ミル」

「おはようございます。エレウス先輩！」

「オーッス、ミル嬢！」

ミルハーブが街を歩くと全員が彼女に振り返り、声をかける。そんな町人や学校の生徒たちにミルはいつも明るく返事を返すのだった。

シュトレーン魔法学校でのミルの一日はまず級友たちに挨拶をすることから始まる。

教室の扉を　女の子にしては　豪快に開け放ち、大きく胸いっぱいに息を吸い込む。

「おはようございます！」

この挨拶こそがミルのノクターンでの一日の始まりだ。

「おはようエレウスさん」

「おーっす、ミル」

「ハヨ―」

教室のあちこちから挨拶が返ってくる。これこそが上述で述べたようにミルが優等生でありながらいじめをうけない理由の一つでもある。彼女は誰に対しても気さくな少女であった。ところで、ミルはここシュトレーン魔法学校の最上級生であと一年間この学校に通えば魔法学術の課程は一応終了したことになる。

（でも、本当にこれでいいのかな）

ミルは最上級生になってからそのことでよく悩んでいる。確かにシュトレーン魔法学校の中ではクラス・学年どれをとっても一番だが、自分以上の魔法の使い手を知らないために自分の扱う魔法にいまひとつ自信が持てないでいた。

（アルスは前に自分以上の剣士と試合をしてぼろぼろに負けたという手紙をくれた。やっぱり遠くに出ないと自分の実力ってわからないものなのかな…）

ミルは最近、よく図書室に行く。魔法についてもっと詳しいことを勉強するためだ。高等魔法と呼ばれるものがあれば、見よう見まねで使ってみようとするし 成

功は滅多にしないが 学校の授業ではあまり多くは語られない魔法の歴史について

も知ることができると。魔法に関する図書を読むと、必ず自分の知らない単語や記号が

出てくる。その意味を解読したり訳したりする時がミルの一番の幸せだったりする。

『……古代に魔法王国として栄えていた国には次の五つである。ミスリル・ラクチュアリ・ドーマ・レスミール・アリミエラ。これらの国々は…』

（あれ、このレスミールってアルスが通っている剣の学校があるところじゃ…？）

「ほう、古代の五大王国ですか」

椅子に座っているミルの背中に渋いバリトンが伝わってきた。

図書室長のグレバートだった。

「グレバート先生」

「世界中に魔法王国と呼ばれる国はいくつもありますが、その中でも古代から現代に至るまでずっと影響力の衰えない国々がこの五つです」

「先生、このレスミールという国はどういう国なのですか？」

「レスミールは五大王国の中では一番歴史は浅い国ですが、魔法・武術のどちらにも長けている国ですね。国の象徴としてレスミンという花が街中に咲いていてとても綺麗な街だと聞きます」

「魔法にも武術にも長けている国……」

「やめておきなさい、ミル」

グレバート室長はため息をつきながらつぶやいた。

「いかに貴方がこの学校位置の成績優秀者であり、この学校の図書すべて熟読していてもレスミールの魔法学校に行くことは不可能でしょう」

「え？」

ミルは自分の考えていることを先に言われ、しかも駄目だしまでされてしまい顔を曇らせた。

「残念ながらシュートレーン校のレベルでははるか及びません。レスミールの学校をうけたいのであれば、まず魔法使いとして熟練しているレスミール出身の者に話を聞くべきでしょう」

「……………」

「幼なじみを追いたくて焦る気持ちはわかります。私もどうにかしてあげたいのですが、残念ながら私は魔法使いとしての力量はほとんどない。貴方にこうして注意を促してあげることしかできないなんて情けない限りですよ」

「そんなことないです。グレバート先生の忠告がなければ私は無謀にもレスミールに行くつもりでした。彼に会ったためなら……」

ミルの脳裏にアルスの姿が浮かぶ。

（もう十年になるんだよね。早く会いたいよ……）

午後も中ほどを過ぎ、シュトレーン魔法学校の一日が終わる。生徒たちは部活に行く者・帰宅する者に分かれ、それぞれの行くべき場所へと散っていく。

部活に入っていないミルは寄り道をせずに馬車の停留所で場所を待つ。そして、再び三十分ほどかけてケティットの村へと帰っていく。そしてまた、特に寄り道もせずに家まで帰るのだが、今日は違った。

「あのお、すみません」

ミルは突然声をかけられた。

この出会いこそが彼女の運命を左右することになるとは、ミルはまだ微塵も気づいていなかった。

第5話

第5話

今日の天気は快晴。

絶好の試合日和だ。

「いい天気だぜ。天気が悪いとテンションが下がるからな」

ゲイルは練習用のフラットソードを鞘から抜いた。

「へへ、腕になるぜ」

「相変わらず試合になると元気が出るなお前」

軽いプレートアーマーをつけながらアルスは笑った。

「あつたり前だろ。練習だと教官が横槍を入れてくるから嫌いなんだよ。試合なら自分の好きな型で勝負できるからな」

確かにゲイルの言うことも一理ある。しかし、この武術学校に入学して晴れて卒業をすると、レスミール王国騎士団の騎士採用テストに面接なしの実技のみで挑める資格を得られるためお得なのである。その実技試験のときに型どおりの試合ができることが騎士団に入る条件のひとつにあげられているというわけである。

「別に俺はこの騎士団に入りたくて剣術をやっているんじゃないんだけどな」

ゲイルがぶつぶつとぼやく。

「まんざら悪いものでもないだろう。型どおりにやれば、少なくとも自分のミスで被害を受けることはないし」

「しかし、鞘を抜くところから普通訓練するかあ？」

「必要だからするのだろう。ま、俺も正直あまり必要だとは思っていないけど」

つつい本音が出てしまう。ゲイルが嬉しそうに「だろお？」と笑う。

「今日こそはそれを教官どもにわからせてやるぜ!」

先にアーマーをつけ終わったゲイルが颯爽と更衣室を去っていった。

（わからせてやったとしても、それで教え方が変わるとは思えないけどなあ）

アルスはそう思いながらも、熊の召集が掛かっているのを聞きつけ急いで支度を整えた。

熊、もとい審判員である武術教官の召集を受け、アルスたち生徒は円形闘技場を模した小さな広場に集められる。主に試合と名のつく儀式を行うときは試験や練習試合であつてもここを使う。

練習試合とはいえ、観客席は満員御礼である。その中でもひととき目立つ集団がある。夏が来るにはまだ少し時期が早いが、それでも厚手のローブを着ているのですぐにわかる。あれはここ、レスミルス武術学校と対を成すレアドナル魔法学校の生徒たちだ。この二校はよくチャラチャラした者たちが、もちろんそうでない者もいるが、合コンだのを設定したりしてそれなりに生徒同士の友好関係は深い。そのため、自分の彼氏や友人を応援に来る女子がここに来ているのだらう。ゲイルに言わせると「ケツ、くだらねえ」らしい。

「そういえばトーナメント表をまだ見ていなかったな」

「そうだった」

アルスとゲイルはベンチの後ろに貼つてあるトーナメント票に目をやった。二人は見事に違うブロックに属されていた。

「まあ、気張らずにいこうぜ」

「ああ。どうせこの試合も何十回目かわからないしな。いまさら緊張なんてしないぜ」

「それもそうか。そんじゃ、決勝で会おうや」

「途中でしりもちつくなよ」

「途中で逃げるんじゃないぞ」
アルスとゲイルの間には熱い火花が飛び散っていた。

第6話

第6話

「なんででしょうか？」

ミルは尋ねてきた男を見上げた。身長は 180cmくらいだろうか。ミルよりもはるかに高く、結構首を傾けないと顔が見えない。

「宿屋の場所を教えてほしいのですが」

長身の男は土ぼこりにまみれていたり、ところどころ擦り傷や切り傷もあったりした体でそう聞いてきた。

「宿屋はこのまままっすぐ歩いて、別れ道を左に行ったらありますよ」

「ありがとうございます」

長身の男は丁寧に頭を下げた。

なんというか木がお辞儀をしているみたいに見えた。

「あの、もしかして冒険家さんですか？」

ケティット村に冒険家が来ることなどほとんど稀だったので、ミルは珍しそうに青年に尋ねたところ、青年は「そうですよ」とにっこり微笑んだ。

「この村に冒険家が来るのはとても珍しいようですね」

「ふえ、どうしてわかったんですか？」

「貴方のように可愛らしいお嬢さんの顔を見ればすぐにわかりますよ」

「か、可愛いだなんて……」

ミルは両手を頬に当てて恥ずかしそうにつぶやいた。そんなミルの様子を冒険家は楽しげに見つめていた。

「ここで会ったのも何かの縁です。自己紹介をしておきましょう。

僕はラスレン・グレーヴェルです。見てのとおり冒険家です」

「私はミルハープ・エレウスです。この村の皆はミルって呼んでくれています」

「では、僕もそのように呼んでもいいですかね？」

「もちろんですよ」

ミルはにっこりと微笑んだ。

ラスレンはミルの案内で五分もかからずに宿屋に到着した。

「はい、ここが宿屋です」

「ありがとうございます。こんなところにあっただなあ。村の中を一周しても見つからないわけだ」

「少しわき道のほうですからね」

実際はほとんどケティット村のはずれといってもよい。

「ミルさん、案内をしてくれてありがとうございます。おかげで野宿をせずに済んだよ」

「野宿ですかあ。村の中で野宿も楽しそうだなあ……」

「普通は野宿するときは村の外に出ますけどね……」

ラスレンはそう言って苦笑した。

（なかなか天然差を見せつけてくれる娘だ）

「それでは、僕は一旦荷物を置きに行きますね。ミルさん、機会があればまた会いましょう」

そう言って背中を向けたラスレンを、ミルは思わず呼び止めた。

「なんででしょう？」そう言ってラスレンはゆっくりと振り向く。

「あの、ラスレンさんはレスミールという街を知っていますか？」

「ええ、知っていますよ。ソグリアテス大陸にある魔法王国ですね」

「私、一流の魔法使いを目指しているんです。いまもこの村の隣街のノクターンで魔法の勉強をしています」

「ほう、一流の魔法使いですか。確かにレスミールは五大魔法王国の一国ですから、魔法の勉強にはうってつけでしょうね。しかし、レスミールにあるレアドナール魔法学校はハードルの高い魔法学校で有名です。ミルさんのいうノクターンの魔法学校がどのくらいのレベルかは知りませんが、並みの魔法学校程度のレベルでは到底試

験には受からないでしょう」

「そ、そうなんですか……」

ミルは力なく首を垂れる。

「何か事情があらいのようですね。よければ話してもらえませんか？」

「実は……」

ミルはラスレンに全てを話した。

幼なじみのことや、彼の父親が言ったこと、魔法学校の出来事……

「なるほど、そういう事情でしたか」

「私、早く一流の魔法使いになりたいんです。そして、彼に会いたい」

「レスミールまでですか？いくら一流の魔法使いとてレスミールまで一人で旅するのは少々心もとないと思いますが」

「それでも会いたいんです！彼は私にとって大きな支えだから……」

「……」
ラスレンはしばらく何かを考えるようにあごに手を当てた。そして、ミルにこう提案した。

「僕はネクス大陸を北上する旅をしています。これは貴女の意味次第ですが、貴方にその気があるのなら僕が幼なじみのいるレスミールまでお供をしますよ」

「え？」

突然の誘いにミルは何を言われたのかわからなかった。

「冒険家になることは魔法使いとしての自分の力量を知るいいチャンスにもなります。まさに一石二鳥だと思いますが？」

ラスレンの提案に、ミルはすぐに返事を返せなかった。今現在までただの村娘である自分がいきなり村の外に旅に出るなんて

すっかり考え込んでしまったミルにラスレンはゆっくりと背中を向けた。そして去り際にこう言った。

「二、三日はこの村に滞在することになるでしょう。その間に答えを聞かせてください」

ラスレンの言い方はとても優しいものだったが、ミルには重みのある言葉以外の何者でもなかった。

第7話

第7話

アルスは順調に試合を勝ちあがり、あっという間にトーナメント表の王冠に近づきつつあった。さすが、伊達に十年もこの学校にいないだけのことはある。

「よう、勝ち抜いているじゃねえか」

「お前こそ。さっきの試合見てたぜ」

そういうアルスの顔には相変わらずだなと言わんばかりの微笑が浮かんでいた。ゲイルは「まあな」と笑った。

「ところで次のお前の相手だけだよ…」

「うん？」

「ありやあ、気をつけたほうがいいぞ」

「…強いのか？」

アルスの顔がキュツと強張ったものになる。

「ああ、強敵だぜ」

ゲイルはそう言って闘技場の観客席を指差した。下の位置からではよく見えないがゲイルの指した先には、女の子たちが数人輪になっていた。そして、その中心にいる背が低めの男。

「最近ではああいう男がもてるらしい。もはや三Kは意味を持たずにいるな」

真剣な表情をしているゲイルとは逆にアルスはまたか、と小さくため息をつく。

審判員が響きのある肉声で次の試合の対戦者、すなわちアルスと観客席にいる男の名を呼んだ。アルスはぶつぶつとぼやくゲイルに蹴りを入れてから闘技場の真ん中へと進み出た。

「準決勝戦！アルス・マディーン対〇〇〇！」

審判員はアルスの対戦者の名前を読み上げたが、アルスには別段

興味はなかった。今、考えていることはただ一つ。目の前の対戦者がどれほどの手並みかということだけだった。いでたちや試合に対する緊張感がそれほどないことから一年以上はここにいることが予想できる。

（少しは楽しめるかな？）

アルスは剣の鞘に手をかけて試合の合図を待つ。

「開始！」

審判員の声と旗を揚げる右腕を合図に両者が突進する。

まずはかち合い合戦に持っていくのはアルスが初対面の相手と対戦するときに必ず使う手だ。互いにぶつかり合い、剣と剣との押し合いで対戦者との大体の力量差を測る。文章で書くと、屁理屈をこねているようにしか見えないが、実際アルスはこれをほとんど長年の経験で瞬時に、無意識で行っている。

（ふん…）

アルスは押し合いながら、対戦者の顔をチラリと見る。流石に準決勝だけあって、今までの対戦者と少しは違うことを試合が始まってから数秒で判断した。

（これならどうだ）

押し合いでの勝負の場合、いかにして身を引くかも大切な戦法の一つである。

「……！」

対戦相手の男はアルスが不意に身を引いたことに驚き、前のめりになる。アルスの作戦は成功である。対戦相手の男はすぐに体勢を立て直すと、まっすぐにアルスに向かって突進してきた。

「やああああ……！」

男にしては高めの声だな、と思いつつアルスは敵の突きかわすとすかさず小手の上に一撃を浴びせた。

「つう！」

男が小さなうめき声をあげる。相手がひるんだ一瞬の隙を逃さずアルスがもう一撃を加え、試合はアルスの勝利に終わった。対戦相

手の後ろの観客席から悲鳴やらブーイングやらが聞こえたが、男は気にもとめずアルスに握手を求めた。

試合を終え、ベンチに戻るとゲイルが上機嫌でアルスの肩を叩いてきた。

「さすがアルスだぜ。あんなモテモテ野郎に負けるわけがねえやな」
「まあな……」

アルスはとりあえずゲイルにあわせておいた。

「そっいや、次はお前も決勝だな」

「ゲイルは？」

「もちろん、俺も決勝だぜ。例年通り、俺とお前の対決だ」

「へ、もうあんな技は通用しないぜ」

アルスはニヤリと口元を緩める。

「誰があんな技を使うかよ。今回はもつとすげえの用意してきたぜ。前みたいに正統派のバトルにはさせねえぜ」

ゲイルもいやらしく笑う。数秒間、お互いに不敵な笑みが沸き起こった。そして、再び審判員によって二人の名が呼ばれる。

「決勝戦！アルス・マディーン対ゲイル・ホーンラグ！試合開始！」

タンツ！二人の少年が軽快に地面を蹴る。そのままぶつかり合いに持っていく……と思いきやゲイルの姿が突然消えた。

（真上か）

アルスはそのまま走るスピードを落とさず、軽くジャンプをして方向転換をする。振り向きざまにゲイルの剣が振り下ろされてきたので、それを軽く受け止める。

「いつもどおりの戦法じゃないか？」

審判員に聞こえないようにつぶやく。

「へ、これはいつものご挨拶よ。本番はここからだ」

両者は一度身を引き、再び突進を仕掛ける。甲高い金属音が響き、剣と剣がかち合う。押し合いはそのまま続くかと思いきや、ゲイルが突然勢いよく身を引いた。しかし、ゲイルの常套手段であることだと知っているためアルスは特に体勢を崩すことなく次の攻撃に移

った。再びかち合い、不意にゲイルがアルスの後ろに向かって「あつ！」と叫んだ。

「あれはなんだなんて古い戦法はもう通じな……いい!？」

アルスの股間に恐ろしいほどの痛みが走った。「ま、まさか……」とアルスはゲイルの二本の足に注目する。右足がまっすぐアルスの股間に向かって伸びている。一応アーマーはつけているもののやはり効果は大きい。

「へへ、いい一撃だろ？このまま俺が引けばお前は……」

ゲイルは嫌らしい笑みを浮かべながらあたかもかち合いから引き合いに持っていくかのように後ろに飛び退いた。まだ激痛が残っているアルスは剣がかち合うことによって得られていた支えを失くし、へなへなと情けなくその場にしゃがみこんでしまう。

「勝者、ゲイル・ホーシラグ！」

何が起こったかを知らない審判員は地面に座り込んだアルスをあつさりと戦闘不能とみなして、勝者宣言をする。周りからの歓声が響く中、ゲイルはあたかもよく戦い抜いたアルスを助け起こすかのように手を差し伸べ、闘技場はさらに沸きあがった。

第8話

第8話

「ただいま」

ミルは力なく玄関で靴を脱ぎ捨てた。

「おかえり、お姉ちゃん」

吹き抜けになっっている二階からミルの妹モアが首を出して姉の帰りを迎える。

「おかえりなさい、ミル。今日は一段と遅かったじゃないの」

「ごめんね、お母さん。村に来た冒険家さんを宿屋まで送り届けていたの」

「そうなの。変なことは吹き込まれたりしなかった？」

「え？」

ミルは一瞬ギクリとした。

もしかして、あの現場を見られていた？両親にだけは決して見られてはいけない会話を見られていた？

「ど、どうして？」

ミルの両手にじんわりと脂汗が浮かんでくる。

「だって、宿屋に送り届けるだけならすぐに帰ってくるはずだから。もしかしたら何かあったのかなって心配していたのよ」

「そうだったんだ、ごめんなさい。でも、何も吹き込まれていないから大丈夫」

「…そう」

ミルの母親はどこか疑いのまなざしを向けていたが、それ以上追及はしてこなかった。ミルは母親が去っていき、ようやくホッと胸をなでおろした。そして、やや駆け足で二階に上がると、妹の部屋を軽くノックした。

「なあに、お姉ちゃん」

「ちょっと相談したいことがあるんだけどいい？」

「うん、別にいいよ」

モアは姉を部屋に迎え入れると、誰にも聞こえないようにドアを閉めた。

「それで、相談ってなに？」

モアに聞かれ、ミルはラスレンとの会話を全て話した。話を聞き終えたモアは「ふん」と意味深につぶやいた。

「それで、お姉ちゃんはその人についてアル兄のいる街へ行くの？」

「できれば行きたい…」

「お母さんたちにはどう説明するの？」

「それは…」

ミルは答えられなかった。ミルの両親はとある時を境に冒険家を酷く嫌うようになった。娘が冒険家になると知ったら激怒どころではすまないだろう。自分のわがままのせいで家族が崩壊するのは耐えられないことだ。

「じゃあ、アル兄を諦める？」

「そんなこと、できないよ…」

「お姉ちゃん、それじゃ相談にならないよ。堂々巡りを繰り返すだけ」

「わかってる。だけど、今を逃すといつアル君に会えるかわからなくなる。手紙だと会えるのはまだ当分先みたいだし。下手したら一生会えなくなるかもしれない」

「まさか。アルス兄はここに帰ってくるよ。お姉ちゃんを放ったままにするわけないでしょ！あの時の『せいやくしょ』まだ持ってるんでしょ？」

「持ってるよ…」

「じゃあ、大丈夫でしょ。そんなに心配することないって…」

「……………」

結局、この日はモアに言いくるめられたミルはそれ以上何も言えなくなつて妹の部屋を後にした。その後も、ミルが悩む度に時間は

急速に進んでいった。

ミルはずっと二つの領域の間を右往左往していた。このままここにいてもアルスは『せいやくしょ』を果たすために必ずミルを迎えに来るだろう。しかし、それはいつの日になるかわからない。明日かもしれないし一週間後かもしれない。もしかしたら十年後になるかもしれない。それでも、アルスは約束を守るためにここに帰ってくるだろう。一方、ラスレンと共にレスミールへ行けば、少々辛い日々が続くかもしれないが比較的すぐにアルスと会うことができる。それに、夢にまで見た五大魔法王国の一つを観光できるのだ。これほど嬉しいことはない。だが、その代償としてミルは家族を捨てなければならぬ。相談ができるものならしているだろうが、あいにくとそうもいかない。話そうものなら真っ先に反対されることは必至だろう。

ミルは自室の窓からぼんやりと外を眺めていた。今、自分がこうしてぼんやり外を見ている間にアルスは何をしているのだろう。気になって仕方なかった。もしかしたらアルスはもうすぐそこまでミルに手を伸ばしているのかもしれない。ラスレンを使えば、アルスの手を取ることができる。しかし……

気がつけば、ミルは宿屋に向かって歩いていて。おばさんに挨拶をして、二階の客室をノックする。

「どうぞ」

優しい声が返ってくる。ドアを開けると、ラスレンが「やあ」と快く迎え入れてくれた。

「今日が約束の三日目ですね」

「……………」

「決心はできましたか？」

「……………」

「前にも言ったとおり僕は冒険家です。こんな体でも貴方を守るにとくらはできますよ。レスミールへは必ず送り届けると約束します」

「……………」

「僕は貴方の意思に重なり助力をするだけ。貴方がその意思を破棄するというのがあれば、僕もいつもの旅に戻るだけです」

「……………」

宿屋の一室に永劫とも言える長い沈黙が訪れる。ミルはひたすらラスレンの淹れた紅茶に視線を落としたままで、ラスレンもまたそんな彼女を黙って見ていた。

「出発は……………」

ミルがつぐんでいた口を開いた。

「出発は今日の夜更けまで待つてもらえませんか。皆に気づかれたくないから」

「…わかりました。では、それまでに準備を整えておいってください」
「はい……………」

ミルは小さく頷き、ラスレンの部屋を後にした。

（これで、いいんだよね）

ミルはふっと宿屋の窓を見上げた。まだ高い位置に太陽がある空の下では何羽もの鳥が楽しそうに戯れていた。

第9話

第二章『想いを彼

方へ』

第9話

ケティット村はネクシス大陸の中でも一、二を争うほど夜の訪れが早い。太陽が沈んでから二、三時間もすれば辺りは一寸先も見えぬ暗闇と静寂に包まれる。忍びの旅にはまさにうってつけの夜だった。

ミルはせめて妹にだけでも声をかけていこうかと思ったが、それが原因で両親に見つかって引き止められてはまずいので涙を飲んで妹の部屋の前を後にしたのだった。

すっかり闇に閉ざされたケティットをミルは手探りで進むように慎重に早足で歩いていく。さっきも言ったとおりケティットの夜は早い。辺りが暗くなれば外を歩く村人なんていないのだ。そのため、昼間とは若干勝手の違う道にミルは迷わないかどうか心配だった。いや、案の定迷っていた。ミルはすっかり村のはずれの、つまり宿屋のあるほうへと進んでいた。待ち合わせの場所は村の出口なので、方向からいうとまるつきり逆方向である。

「お姉ちゃん、どこ行くの？」

「これからラスレンとの待ち合わせ場所に行くの」

「それって、村の出口でしょ？ここは宿屋だからまるつきり反対だよ？」

「え？」

道を歩くミルの足が止まる。そして、同時にどうして自分に話しかける人物がいるのだらうとのんびりとながら疑問に思う。

「あ、え〜と、もしかしてばれてたりするのかな…？」

ミルは背中を向けたまま、しかし額には大量の汗をかいたままつぶやいた。

「ばれてるよ」

声はあつさりと突き放すように言った。

「ただし……」と声の調子が急に明るくなる。

「あたしにだけだけどね」

ミルの背中からモアがひょっこりと顔を出した。

「きゃあ！」

「わあ、駄目だよお姉ちゃん。皆起きちゃうよ！」

モアは小さな声で叫びながら姉の口元に人差し指を置いた。幸い、声を聞きつけた村人はいないようだ。

「どうして？」

落ち着いてからミルが話を切り出した。

「う〜ん、話聞いてたらなんか楽しそうだなあ…と思ったから。それに、いつかはアル兄みたいに自立してどこかの街に行きたいなって思っていたしね」

「モア…」

「早く行こうよ。待ち合わせの時間までそんなにないんでしょ？」

「あ、いけない。急ごう」

待ち合わせに少し遅れたものの、ラスレンと合流できたミルはモアのことを話すと「可愛いお嬢さん二人と旅をするなんて願ってもないことです」と二つ返事で了解してくれた。

「夜遅くの出発ということも踏まえてケティットの隣町ノクターンで宿を取ろうと思いますが」

「りょーかい！」

「……………」

「ミルさん、どうかしましたか？」

苦い顔をしているミルにラスレンが怪訝な顔をして尋ねる。

「ごめんなさい。ノクターンは私が通っていた魔法学校があるから下手をすると見つかってしまいかもしれないんです…」

「なるほど。しかし、港町ネアールに行くにはノクターンから北上していったほうが早い。南からだ迂回してしまう形になりますよ」
「あ……」

ミルの気持ちを知っていてか、ラスレンは諭すように言った。

「いいんじゃない、お姉ちゃんがそうしたいなら」

なかなか結論を出さないミルにモアが明るく言った。

「迂回したって近道したってアル兄のところに行くまでの日にちが前後するだけで会えることには変わりないでしょ。ならどのルートで行ってもおんなじだよ」

「確かに、モアさんの言うとおりですね。僕は貴方を幼なじみのところまでちゃんと送り届けると約束しましたからね。貴方たち二人が決めたのならどこへでもお供しますよ」

ラスレンもにつこりと笑った。ミルは二人の笑顔に申し訳なさそうに頭を下げた。

「ありがとうございます」

「では、ルートを変更してケティットから西を回って行きましょう。ただし、今夜は野宿ということになりますので、いざというときのための覚悟はしておいてください」

「??」

「は、はい…?」

二人の少女はラスレンが何に対して覚悟をしておくように言ったのかわからなかったが、とりあえずこれで旅の進路は決まった。

（アル君、できるだけ早く会いに行くから待っててね）

ミルはアルスへの想いを乗せてモア・ラスレンという仲間と共にネクスス大陸全土を回る旅に出るのだった。

第10話

第10話

「それでは、今日はこの辺りで野宿にしましょう」

ラスレンは軽く両手を叩いて微笑んだ。彼のその一言に今まで無言で歩いてきたミルとモアの表情がホッと和らいだ。

「では、これから野営の準備の説明をしますのでよく聞いておいてくださいね」

ただでさえ、遠出に慣れていない二人にとってラスレンのこの一言は彼女たちを地獄に叩き落とすも同然だった。

「野宿って、ただ草の上に寝るだけじゃないの？」

普段は村の中を駆け回って元気いっぱいのもアも慣れぬ遠出にラスレンに文句を垂れる。

「まさか！そんなことをしたらたちまち夜行型の魔物に襲われてしまいます」

「でも、ここで寝るんですよね？」

ミルが草の上にしゃがみこみながらつぶやくと、ラスレンはにっこりと微笑んだまま袋の中から三つセットの球体を取り出した。

「そこで活躍するのがこの結界球です。この三つの球で自分たちの休む部分を囲んでやると、魔物はそこから中に入ってこれない……という仕組みです」

なにやら胡散臭そうな説明だったが、ラスレンによれば、これはどの冒険家も常套の装備らしいのでおそらく嘘はないだろう。

早速この三つの球体を自分たちが休む場所を囲むようにして配置する。

「この時の注意点ですが、結界球はなるべく広めに配置することです。理由は二点あって、一点目は単純に寝るスペースを大きく確保したり、集いの場を広くしたりするため。もう一点は……まあ、今

日起こるかはわかりませんが実際に遭ってからのほうが説明しやすいですね」

「「???」」

ミルとモアは揃って首を捻ったが、この際寝られれば文句はなかった。

「次はテントの設営ですね。これは簡単です。この簡易テントにこの空気ポンプで空気を送り込むだけです」

ラスレンはそう言って空気ポンプを二、三回足で踏み込んだ。すると、たったそれだけの動作で今までただのつぶれた布切れだったものが小さな一つの家として完成した。

「すごいすごい！」

モアは眠いのを忘れて目を丸くしてテントが膨らむ様子を見ていた。

「後はこの中に入って寝袋を敷くだけです」

「わあゝい！早く休もうよ。もうクタクタ……」

「そうですね。次の日のために体を休めておくことも冒険家の心得の一つです」

ラスレンはそう言って荷物の上にくくりつけてあった寝袋を二つ、ミルとモアに渡した。

「あれ？ラスレンさんの分は？」

ミルが問うと、ラスレンは苦笑して言った。

「実は、旅に同行するのはミルさんだけだと思っていたので二つしか寝袋はないんですよ。と言うわけでお二人のどちらかには僕の寝袋を使ってもらうことになります」

ラスレンはその後に「もちろん、ちゃんと消臭してますから大丈夫ですよ」と笑顔で告げた。

ラスレンにそう言われて、二人の動きがピタリと止まった。ラスレンの分の寝袋を奪っておいて気持ちよく眠ることなんてできないだろう。ラスレンもそんな雰囲気を感じ取ったのか「大丈夫ですよ」と微笑んだ。

彼が袋から取り出したのは薄手の毛布だった。

「今夜、僕はこれに包まって寝ますから。安心してお休みなさい。さつきも言ったとおり次の日に支障が出ないようによく休んでおくことも冒険家の大事な仕事です」

二人は結局ラスレンの笑顔に負けて、テントの中で寝袋に包まって休むことになった。歩きつかれたのか、少女たちはテントに入つて間もなく可愛らしい寝息を立てて眠っていた。その様子を微笑ましげに見つめながら、ラスレンはある計画を実行するのであった。

「起きてください!!」

ラスレンの大声に、ミルとモアは眠そうながらも身を起こした。

「なあゝに?」

「どうしたんですか?」

眠そうに尋ねるミルとモアにラスレンは申し訳なさそうな顔で「やられました!」と一言だけつぶやいた。

「グルア!」

「くう!」

ラスレンは長い棒のようなもので噛み付こうとしてきた狼をかるうじて食い止めた。

「ラスレンさん!!」

二人の少女がテントへの進行を必死に食い止めているラスレンの名を叫ぶ。

「これ以上先には行かせませんよ」

ラスレンは、長い棒をそのまま真上に振り上げて狼を後ろに退かせた。ラスレンがテントを出たのに続いて、ミルとモアも外に出た。結界球は見事に破られ、テントの周囲を狼達が囲んでいた。

「結界球が破られている…」

「どうして!?!」

「中には結界球を破ってくる者もいるんですよ。この辺りの魔物にそんな力はないと思っていたが、油断しました」

「ど、どうするんですか…!」

狼に一步、また一步と追い詰められながらミルがつぶやいた。ラスレンは苦い顔をして「この包囲網を打ち破ります」と低い声で告げた。

「貴方たちに魔物との戦い方はまだ早いと思っていましたが、こうなつては仕方ありません。なるべく僕から離れないでください。行きますよ！」

刹那、ラスレンは狼が動くよりも先に銀色に輝く長い棒を口に加え、息を吹き込んだ。長い棒から発せられた心地よい音色があたりに響き渡り、狼たちはすっかりそれに聞き入っている……

「狼たちが音楽に聞き入っている……」

「お姉ちゃん、今のうちだよ！」

「え？」

ミルは何のことだかわからずにモアの顔を見下ろした。

「魔法だよ！お姉ちゃんの攻撃魔法であの狼たちをバーンっとなつつけてよ！」

「で、でも何の魔法を使えばいいの？」

「何でもいいよ！今がチャンスなんだから！」

焦った表情で叫ぶモアにミルは自信なさげに頷いて、学校で習った魔法を紡ぐ。しかし、狼たちの恐怖が頭から抜けないのなかなか詠唱の言葉を紡げない。

（駄目、怖い！）

ミルはどうしても狼たちを見ることができない。いつの間にか、どこで買ったのかもわからないトンファーを振り回してラスレンと共に狼を追い払おうとするモア。持ち前のすばしっこさで致命傷は避けられているが、それでも何度か傷を負う事だつてある。

（どうして、モアは狼さんたちに立ち向かつていけるの？）

普通だつたら一匹出遭っただけでもすぐみあがつてしまうだろう。それなのに、ラスレンはともかく妹のモアは怯みながらも狼たちを必死に追い払おうとしている。受けたら痛い傷を負いながら……

結局ミルは魔法を一回も発動させることなく初の戦闘を終了した。

テントを襲撃した狼たちは一匹残らず一目散に退散していった。

「や、やったあ……」

モアは万歳をしようと両腕を上げようとするが、がむしゃらにト
ンファーを振り回していたためか、両腕が激しく痛んだ。

「大丈夫!？」

自分に駆け寄る姉にモアは弱々しく「だいじょぶだいじょぶ」
と微笑んだ。そんな二人の元にラスレンがゆっくりと歩み寄る。

「二人ともお疲れ様でした」

「ほんとに疲れたあ……」

「ラスレンさん、さっきの狼さんたちはどうして結界の中に入っ
て来れたんですか？」

「結界球は完全に魔物をシャットアウトするわけではないんです。
結界を突き破ってくることもあるんですよ」

「怖い……」

ミルはボソッとつぶやいた。その一言を聞き逃さなかったラスレ
ンはやほりにっこりと「冒険家とはこういう職業です」と微笑んだ。
そしてさらにこう続けた。

「引き返すなら今のうちですよ」

ミルは彼の笑顔の中に秘められた厳しい問いかけに答えられずに
いた。

第11話

第11話

「ようこそ旅の方。ここはモールの町ですよ」

町の入り口にいる町人に案内され、三人はすぐに宿屋に直行した。まだ、朝も早いのだが狼たちの襲撃もあり、ミルとモアの体力は限界に近づいていた。

「では、僕は町で情報収集をしてきますので、ゆっくり休んでいてください」

ラスレンはあれだけの闘いを繰り広げて一夜明けた後だというのに、ケロつとした表情で宿屋の一部屋にミルとモアを残して外に出て行った。

「「はあ〜」」

ミルとモアは顔を見合わせるなり、ため息をついてベッドに寝転んだ。

「なんか、あたしたちが思っていたよりも厳しい道だね…」

「うん。足は痛いし、魔物さんがいっぱいいた…」

モールに来る道中も魔物との遭遇は絶えなかった。ラスレンによれば、太陽が出た瞬間が魔物にとっての朝であり、太陽が沈んだ瞬間が夜なのである。すなわち、日の出の瞬間に魔物はこの広い平原を徘徊する存在となるのである。

「ラスレンさんの奏でる曲で追い払ってはもらっているものの、やっぱりまだ慣れないな、戦いは…」

「あたしも。もう両腕が上がらないよ…」

「自分の実力を試すことがこんなにも大変なことだなんて思わなかったよ…」

「いやいや、これは別物でしょ。アル兄も手紙に書いてたけど、剣士同士の試合みたいなものがあるんだってよ。お姉ちゃんの学校に

はないの？」

「ないよ。シュトレーン魔法学校はそんなに大きな学校じゃないから。仮に試合をしても負けちゃうよ」

「ふ〜ん…」

モアはなんとも微妙な返答をすると、そのまま寝返りを打った。

「私たちがいなくなつて、お父さんたち探しているのかな…」

「と思うよ。ちょっと悪いことしたかな。せめて、手紙くらい残していけばよかったかも…」

「うん……急にいなくなると、寂しいな」

「うん…」

ミルとモアはしばらくベッドの上から窓の外を眺めていた。朝も早いせいかな通りはなく、店の準備をしている店主たちがちらほらと道を通るだけだった。二人しかない宿屋の部屋はとても静かで、互いの息遣いだけが部屋に響くのみだった。

ミルはチラリとモアの顔を覗き見た。特に何かを考えているような顔ではないように見えたが、空を眺めているその瞳にはどこか物寂しげな感じがした。ふと、窓に移る自分の顔を見つめてみる。果たして自分も隣にいる妹と同じような感情を瞳に秘めているのだろうか。

（でも、私は決めたんだよ。自分でアル君を迎えに行くって）

そうだ。旅はまだ始まったばかり。草原を歩くことも、魔物と戦うことも全てが始まったばかりなのだ。泣き言をいうのはまだ早い。「そうだよね、アル君…」

第12話

第12話

「山越えですか？」

「ということになりますね」

ラスレンはミルとモアにも地図が見えるように地面に広げて見せた。

「現在いるところがここ、モールです。ここから西に進むとモール山というのがあります。そんなに険しい山ではないので越えるのはさほど難しくないかと思います」

ラスレンは指で滑らかに今後の進路をたどっていく。

「ねえねえラスレンさん、こっちのほうにも道はあるみたいだよ。

何かこっちのほうが楽そうな感じがするなあ」

モアがラスレンの指しているところとは違うところを指で叩いた。地図上には暗闇の祠と記されている。確かに冒険慣れしていない彼女たちのことを考えると、暗いとはいえ平坦な道の続く洞窟のほうがいいかもしれない。

「残念ですがモアさん、この洞窟は先日落盤事故が起きたそうで現在は通行できないそうなのですよ」

「えー、そんなあ……」

先ほどまでのモアの嬉しそうな表情はあっという間に愕然としたものに早代わりをした。それをなだめるようにラスレンが「山も悪くないですよ」と慰めなのか、取り方によってはいじめのようなことを言う。

「ここからはもう後戻りのできない旅になります。今一度確認しますが、決意は揺らぎませんか？」

ラスレンの問いに姉妹は顔を見合わせて、そして何かを確かめるように小さく頷いた。

「もっちゃん！」

「よろしく願います、ラスレンさん」

モアは元気よく右手でピースを作り、ミルは丁寧にラスレンに向かって頭を下げた。

「どうやら決意は固いようですね。では、お二人にはこれをプレゼントしましょう」

ラスレンは優しく微笑むと、袋の中から一本の杖とトンファーを出した。

「僕からの餞別です。同じ同業者としてね」

ミルは杖を取り、軽く構えてみる。

「知っているとは思いますが、杖には魔法の力を高める効果があります。ミルさんへの武器はどれがいいか悩みましたが、弓矢や短剣といったものよりは扱い易く戦いの防げにもならないでしょう」

「ありがとうございます」

「それでは出発しましょう。今晚中にはモール山の麓くらいまでには着いておきたいですからね」

モール山はモールの町から西に位置する山で、標高はそれほど高くない初心者でも簡単に登れるくらい山というには少々お粗末な山だ。しかし、まだ冒険家に成りたての二人にとっては長旅の訓練としてちょうどよいだろう。一日平原を歩き渡る時間を挟んで三人はモール山の麓にたどり着いた。

「さあ、いよいよ本番ですよ」

やる気満々のラスレンをよそに、ミルとモアは口をぽかんと開けながら麓から頂上を見上げていた。

「あの、ラスレンさん……」

「なんでしょう？」

ラスレンは至って平然とした顔をしている。確かに冒険家として

年数を積んだラスレンには山登りというよりは丘歩きといえるのだろ。う。が、どう見てもミルの表情からは疑惑のまなざしが飛んでいた。

「このくらいの大きさの山なら普通どこにでもあるよ。こんな山に登るのぉ!？」

ミルよりも先にモアが文句の悲鳴を口にした。

標高が他の山ほど高くないのは事実のようだが、どう見たって外見は普通の山だ。

「冒険家をしているとお二人の言う普通の山は普通ではなくなります。むしろ、物足りないくらいですよ。僕はそれほど体力があるわけじゃないですが、このくらいの山は平気で登りますよ?」

「モアちゃん、頑張ろう」

仕方ないと言わんばかりの顔でミルはモアをなだめた。文句を言ったところで山道は優しくならないのだ。

「モール山は旅の行商人も通る山。そのため山道の整備はきちんとなされているようですから以外に楽な道のりですよ。まあ、実際に上って見ましょう。レッツチャレンジです」

「そうですね」

「はあ、ゆううつ…」

ミルは苦笑しながら、モアはため息をつきながらしぶしぶ足を動かしてモール山道を登り始めた。

ラスレンが言ったとおり、山道を登るのはそれほど苦ではなかった。緩やかな道や、休憩地帯などの配備もされており、初めはブーイングを撒き散らしていたミルとモアの表情にも徐々に余裕が出てきた。時折聞こえる巨鳥の鳴き声と羽ばたく音にはまだビクツと肩を震わせるときはあるが。

朝から山を登り始めた三人は昼を過ぎた頃には無事にモール山を下山する道に入り、次の町へと向かう道をのんびりと、時には急ぎ足で歩いていくのだった。

第13話

モール山を下山したミル一行はネクス大陸の食の玄関口と言われているエクリールの港町を目指して今日もひたすら、時には魔物と戦いながら歩いていった。

「そつえば…」

ふと思い出したようにミルがつぶやいたのはちょうど小川の流れる木陰で休憩をしていたときのことだった。

「どうしたのお姉ちゃん？」

簡易食のクラッカーを食べながらモアが聞き返す。

「エスパール、私たちが村にいらなくなつててどうしてるかな…」

「あ、そつえば忘れてたね」

モアもしまったと言わんばかりに口を押さえる。

「きつといつものようにアル君からの手紙を持って帰ってきてくれるはずなのに肝心の私がいなくて戸惑っているかも…」

「困ったねえ。ここから呼んでみるわけにも行かないし…」

ミルとモアの会話を聞いていたのかラスレンが微笑しながら「やってみてはどうですか？」とモアの意見を後押しする。

「鳥の耳は案外良いですから山一つ越えたくらいの距離なら聞こえるかもしれませんよ？」

「ほんとにい、ラスレンさん？」

モアが疑いの眼差しをラスレンに向ける。

「ほんとですよ」と少し慌てるラスレン。

「よぉーし、やってみるよ」

ミルはモール山のほうを向いて息を大きく吸い込んで山を越えるくらいの勢いで口笛を吹いた。いつもは優しい音色なのだが、大きさに比重を置いたためか今日のは少し音がつぶれてしまった。しかし、エスパールならこのくらいの音のずれはものともせずやってきてくれた。ケティット村にいた時は、の話だが。

口笛がモール山にコダマしているのは遠耳に聞こえたが、果たしてケティットまで届いているのだろうか。ミルとモアは期待十分に山の向こうの空を眺めていた。しかし、十分くらい経っても鳥のシルエットすら見えなかった。エスパールは小鳥だからこんなに遠くではシルエットなど見えるはずもないのだが。

「来ませんね…」

「やっぱり遠すぎるんだよ」

「……………」

既に諦め越しのモアに対してミルは最後まで強情だった。エスパールはきつと来てくれる。ミルの中の何かがはつきりそう言っていた。そして、さらに十分が経過した。

このままずっと止まっているわけにも行かないのでラスレンが先に進もうと提案を下した。それまでは頑張つて友が来るのを待っていたミルもようやく諦めがついたのか小さく頷いた。そうして再びエクリールへの道を歩いていると、急に誰かに肩をつかまれたような感触に苛まれた。

「エスパール!？」

ミルの肩にはすっかり疲労しきつたエスパールが力なく立っていた。

「この鳥がそうなのですか？」

ラスレンが今にもミルの肩から落ちそうなエスパールをそっと両手の中に寝かせる。両足にはいつもアルスに渡している手紙の入った筒がしっかりと握られていた。

ミルは彼の足からそっと手紙の入った筒を受け取ると、中身を確認した。

（アル君の字だ…）

何日ぶりに見る幼なじみの手紙に、ミルの目から小さな雨粒が落ちた。自分でもどうしてないたのかわからなかった。

手紙の内容に目を通してみる。

『ミル、それからモアも元気にしているか？俺はいつものように剣

術に励む日常だけど、病気もしないで元気にいるよ。ミルは魔法学校のほうはどう？ いつか、ミルのお父さんが許してくれたらモアも入れて三人で冒険がしてみたいな』

「冒険……」

「お姉ちゃん？」

「え？ なんでもないよ。そうだ、返事を書かなきゃ」

「慌ててはいけませんよ。エクリールで宿屋に着いたら書きなさい」

「それから、筒の中にまだ手紙が入ってたよ」

モアが筒から取り出した手紙を渡す。ミルはてっきりアルスの手紙の二枚目かと思ったが、その内容は

「うわぁ、お父さんカンカンだ……」

ミルの表情がたちまち恐怖に変わる。モアもミルから手紙を渡されてからすぐに顔を真っ青にして震えていた。

「この怒り方は今までにないかも……」

「うん……」

真っ青な表情で固まる二人に、ラスレンはすぐに二枚目の手紙が誰からのものなのかを察した。

「でもさぁ……」

何か言葉をかけようとしていたラスレンのよそにモアが微笑した。同じようにミルも先ほどまでの恐怖はどこへやらといった感じに笑っている。

「うん、そくだよね」

「はい？」

何が何だかわからないラスレンはどうしてこの二人が笑っているのか不思議でしようがない。やけになって壊れたというわけでは毛頭ない。

「お父さんのバーカ。悔しかったらここまでおいでー」

「外には魔物がいっぱいいるけど追いつけるかなあ……？」

二人は笑いながら手紙に向かって父親を小馬鹿にしたようなことを言っている。

（この分なら心配はないですね）

父親の手紙に向かって暴言を吐きまくる姉妹を見て、ラスレンは後の始末が想像もつかないことになりそうだと苦い思いながらも、なぜか笑みが絶えなかった。

第14話

アルスはいつものように練習場で一人、稽古に励んでいた。

「せやつ！でえい！」

木で作られた的はアルスの剣による連続攻撃で意図も簡単にバラになって崩れ落ちた。またやつちまった、と心の中で思った瞬間にはもう遅かった。アルスは今月で三度目なのだ。

（まあ、材料はレアドマンズの森に採りに行けばいいから慣れたものだけど…）

いちいち教師のところに行って器材を壊したことを報告に行くのが億劫なのだ。熊は器材を壊したことに關しては馬鹿笑いで対処してくれるからありがたいのだが、一人やつかいな人物がいる。そいつに会うのがたまらなく嫌なのだ。

今、アルスの足元に落ちている的もアルスがここに来たばかりの頃は強大な敵だった。練習用の剣でいくら一撃を入れても木の丈夫さに負けて自分が吹き飛んでしまつて何度も泣きを見た。しかし、それが今は木の丈夫さを乗り越えて簡単に斬ることができるようになってる。

（このくらいの力があれば、ミルを守つてやることくらいできるだろうか…）

アルスはふと自分の右手に視線を落とす。毎日剣を握っていると慣れた今でも血豆くらいは当たり前前にできる。しかし、その痛みにももう慣れたものだった。

（親父はどのくらい強かつたんだろう…）

幼い頃にすぐレスミルスに剣の修行に出されたアルスには父親の強さを実証する記憶がそんなになかった。ここに来る前も週に何度かは父親と剣の勝負も怒気のようなことをしていたことは覚えているのだが。

バサバサバサ。

「!？」

太陽を背にして一羽の鳥がアルスの肩にゆっくりと着地する。

「エスパールじゃないか。こんな朝早くに来るなんて初めてじゃないか？」

エスパールは喉を鳴らしながら自分の足元に視線を落とす。いつものように手紙の入った筒が握られている。

「今回はやけに早いな…」

前回、ミルへの返事を出してからまだ二週間ほどしか経っていなかった。最初の頃はほぼ一週間おきに届いたミルの手紙に対して、剣の修行の防げになるからとアルスが一ヶ月に一回にしてくれと要求したことがあった。

（もしかして村の誰かに何かあったのか？）

アルスは緊張した面持ちで筒を開き、中の手紙を読む。

『アル君へ。』

驚かずに読んでください。今、私はラスレンさんという人と一緒にレスミールに向けて旅をしています』

（ふーん、あのミルが旅ねえ…）

「なにー!？」

アルスは思わず手紙に顔を近づけて今読んだ部分を繰り返した。

「レスミールに来るのか？しかもラスレンって誰だ？俺の知らない間にまさか…」

変な妄想が浮かんでくる。アルスはそうでないことを信じて、手紙の続きを読む。

『あ、誤解しないでね。ラスレンさんはたまたまケティットに訪れた旅人さんで私が無理矢理ついていただけだから。それにモアちゃんも一緒だよ』

最初の一文でホッと安心はしたものの

「モアも一緒かよ…」

安堵のため息と落胆のため息が同時に吐き出された。

（しかし、なぜモアまで）

どういう心境の変化だろう、確かにモアは外で遊ぶのが大好きな女の子ではあったが シグはさらに続きを読む。

『今、私たちはエクリールというネクス大陸の食の玄関口と呼ばれる港町にいます。エスパールがアル君に手紙を届ける頃には私たちはどこにいるんだろうね。とっても気になります。アル君に会うまでに、私はどのくらい成長できるのかなあ。楽しみに待っててね』手紙を読み終えたアルスはしばらく放心状態になっていた。このまま心が外に放たれたまま昇天してしまいそうだった。

「なんか、今年はとんでもない年になりそうだよ、エスパール……」苦笑しながらつぶやくアルスにエスパールは頑張れと言わんばかりにコロコロと喉を鳴らした。

第15話

港町エクリールはネクシス大陸の食の玄関口と言われている大きな市場のある港町で、ここに着船する船は全てが各大陸から運ばれてくる食料貨物用の船ばかりである。では、どうしてそんな港町に立ち寄ったのかというと、荷物運搬のついでに船に乗せてもらおうというラスレンの試みなのであった。モールで得た情報によると、旅客船のないエクリールにとってはこれが普通のことなのだとか。旅人たちも多く利用しているので冒険家だからという理由で毛嫌いはされないとのことだ。今日中に船に乗ることができれば、船の中が宿代わりともなるため宿代も浮くと一石二鳥な訳だ。

まずは軽く鮮魚店兼レストランでエクリールのシーフードを堪能した後、一行は船が停着している港へと向かう。

昼を過ぎ、ちょうど漁師たちは午後からの漁に出るところだったため、残っているのは各大陸から集められた食べ物に乗せた船ばかりだ。この中からどの船を選ぶかも旅人の目の見せ所である。船頭や船員の対応や金銭面の交渉のしやすさ、船の速度等がこういった場合の船を選ぶ条件である。

ラスレンは相変わらず穏やかな表情だが、その目は真剣に港に止まっている船と、その乗組員たちの動作や態度に注目していた。ミルとモアはそんなラスレンに続いて特に何も考えずに歩いている。まさかこれも冒険家にとっては重要な仕事であるなんてことには微塵も気づいていないだろう。

「この船にしましょう」

ラスレンは港を何度も行き来してようやく一隻の船を指差した。船の大きさは貨物用というだけあってそこその大きさがあり、割とスペースもありそうである。

「すみません、ちよつといいですか？」

ラスレンは船の側で休憩している船頭らしき男に話しかけた。そ

して簡単に世間話をする。この時の船頭の対応はとても重要だ。幸い、船乗りらしいあつさりと気持ちがよく豪快な船頭だったのでラスレンはここで本題を切り出す。しかし……

「そいつはできない相談だなあ……」

船頭は気まずそうに後ろ頭を掻く。

「最近、この近辺で海賊がはびこっているらしくてな。俺たちも急遽予定を変更してネクススの東側から回ってきたんだよ」

「ここから東側を回っていきますとどのくらいでソグリアテス大陸に着きますか？」

「そうさなあ、だいたい三ヶ月はかかるかな」

「さ、三ヶ月！？」

船頭の言葉にミルが悲鳴を上げた。

「ずいぶん可愛い娘と旅をしているんだなあ旦那は」

鼻の下を伸ばしたように船頭が顔の筋肉を緩ませた。ラスレンはそんな船頭に苦笑を見せながら後ろに立っているミルに理由を尋ねた。

「せめて二ヶ月後にはレスミールに着きたいんです。彼の誕生日に、間に合わせたいから……」

ミルは頬を赤く染めながら小さな声でつぶやいた。

「いやあ、熱いねえ。恋人を求めての旅か。旦那、こんな可愛い女の子なのに残念だったな」

「まったくですよ。僕も決して悪くないほうだと思いますがねえ……」
ラスレンが穏やかに笑いながらそう言うと、船頭も「俺も」と硬い筋肉をミルとモアに見せつけた。

結局どの船を回っても最初の船頭と同じ海賊の話題が上がり、海路を使つての旅はもろくも崩れ去ってしまった。

「仕方ありませんね。今夜はどこかで宿をとり、明日からまた頑張つて歩きましょう」

「はい」

「あゝあ、せっかく楽ができると思つたのになあ」

船を使つての旅に相当な憧れを持っていたモアは心底残念そうに、宿屋につくまでラスレンにずっと愚痴っていた。しかしそれも食堂で新鮮な刺身を食べるまでのほんの数十分の間だけだったが。

第16話

オム砂漠はエクリールから北に位置する小規模の砂漠である。エクリールからの船旅を断念せざるを得なくなったミル一行は、そのオム砂漠を暑さに耐えながら渡り歩いていた。

「あゝつゝいゝ」

モアのこの台詞は砂漠に入ってからもう何百回目だろうか。最初は十分刻みに言っていたこの台詞も今では十秒おきのペースに早まっている。

「あついねえ……」

モアがそう言う度にミルも彼女をなだめるように、または彼女に動揺するようにあついねえと返すのもすっかり板についてきているようだった。

「ラスレンはそんな服装で暑くないのお……」

着ていた上着を脱いですっかり身軽になったモアに対してラスレンはずっと当初の吟遊詩人の服装のままだった。

「砂漠の暑さも慣れればそうでもないですよ。それよりもモアさん、あんまり肌を出していると太陽の熱で肌荒れしてしまいます。日射病や熱射病にもなりやすいですから上着は着ておいってください」

「えゝ!? しゝぬゝよゝ」

モアはこの暑さにすっかりだれきっていた。ミルがそんなモアに上着を強引に着させる。

「モアちゃん、ファイトだよ」

「うう、あんまりファイトれないよ……」

「大丈夫ですよ。だいぶ進んできたのでそろそろオアシスがあるかと思います。そこで一休みしていきましょう」

「オアシス？」

聞きなれない言葉にミルが首を傾げる。

「砂漠に存在する水源地のことです。木陰もあって涼しいところで

すよ。砂漠はもと森が変化したものですからその一部がこついう形で残るんですね」

「そうなんだ」

「ほら、もう見えてきましたよ」

ラスレンが指す方向には小さい木々と、そこから所々青色が見えた。

「よし、やっと休めるぞー！」

さっきまでのだれ具合はどこへやらと言った感じでモアはオアシスに向かって一直線に走っていった。

「モアちゃん、元気だなあ……」

「ハハハ、でも彼女の元気さには時に僕も勇気をもらいますよ」

ラスレンは相変わらず優しく微笑みながらゆっくりとオアシスに向かって歩を進めた。

「ヒヤッホー！」

オアシスに着くなり、ミルとモアはそのまま湖の中に飛び込んだ。

「プハー、気持ちいいねお姉ちゃん」

「うん。ラスレンさんも来ればいいのにね」

ミルとモアがオアシスに着いたらすぐに湖にダイブしたのに対しラスレンは今ものんびりと木陰に腰を下ろしてなにやらペンを動かしていた。そこはさすが吟遊詩人というべきか、それともただ単に年端も行かない少女と水に入ることには抵抗があるだけなのか。

それから間もなくして二人が水から上がってきたのだが、どこか慌てたような雰囲気があった。

「どうかしましたか？」

ラスレンはペンを草むらの上に置いて、ミルたちを見上げた。

「さっきチラッとですけど、人がいるのを見たんです」

「人……ですか？」

まさかとは思うが盗撮か？ラスレンはそう思ったが、こんな砂漠のど真ん中まで盗撮に来る者もいるまいとすぐに考えを改める。

「少し行ってみましょうか」

ラスレンはゆっくり腰を上げ、ミルたちが見たというその場所まで案内を頼んだ。

その場所はちょうど湖の周りを半周歩いた辺りの草むらだった。

その中にぐったりと倒れている青年が一人。ラスレンはすぐさま彼の呼吸を調べた。

「ただの脱水症状です。僕らの荷物が置いてあるところまで連れて行って水を飲ませてあげましょう」

ラスレンの一言に、ミルとモアはホッと安堵の息を漏らした。再び自分たちが荷物を置いた場所まで戻り、連れてきた青年に水を与えると、青年はすぐさま生氣を取り戻した。

「いやあ、助かったよ。オアシスを見つけたのはいいけど、入った瞬間に力尽きちゃって」

青年は恥ずかしそうに笑った。

「オム砂漠にはどうして来たんです？」

ラスレンの問いに青年は少し考えるような仕草をとったり、しきりにミルとモアを見たりしていたが、やがて何事もなかったかのようになり「仕事さ」とつぶやいた。

「オム砂漠にいるアントリオンという巨大蟻をしとめてダーウィンのギルドで報告すると割のいい報酬が出るんでな」

「なるほど。しかし、そんなことを我々に話してよかったのですか？そんな情報を聞いては我々が横取りするとも限りませんよ」

「その心配はないさ。あんたみたいに女の子を連れて旅をしているような奴に倒せるわけがないぜ」

「もし倒せたら報酬は私たちが頂きますよ？」

「いいとも。やれるものならな！」

青年はそう言つと、自信たっぷりにおアシスを去っていった。

「感じ悪いね」

「うん」

ミルとモアはせっかく助けたのに、と言いたげな顔をしていた。
「せっかくのチャンスです。ミルさんとモアさんもだいぶ戦闘には慣れてきたことですし、ここはアントリオンを倒してあの人を驚かせてやりましょう」

「よーし、やるぞー！」

ラスレンの言葉にモアはやる気満々に右手を空に振り上げた。
オアシスを出た三人はこのまま進むかいったん来た道を戻るかについて話し合っていた。

「でも、さっきまでの道のりに蟻さんの魔物なんていなかったよね？」

「ええ」

「ということはこっちだ！待っているよ、アントリオン！」

モアは回復したばかりの体力を全力投球して残り半分の距離のオム砂漠を走り始めた。

「もう、まだこっちだって決まったわけじゃないのに……」

両手を腰に当ててつぶやくミルをラスレンは「まあまあ」となだめながら一行は次の町、アビ方面に向かって砂漠を歩き出した。

このオム砂漠にいる魔物はほとんどが熱や日光に強い虫や熊ばかりで蟻がいるとは微塵にも思っていなかった。

「蟻はどんなところでも生きる力を持っていますからね」

ラスレンは穏やかな笑みを浮かべてそう語る。

ズブ。音で表すとこんな音だっただろうか。いきなり前を走るモアの足が砂に取られた。

「危ない！」

ラスレンは急いでモアの足を砂から引き抜いた。刹那、突き破るように砂の中から大きな蟻が姿を現した。体の前部に鋭い二本の鎌のようなものを持った蟻、それがアントリオンだ。

三人はすぐに戦闘体勢に入る。ラスレンがまず得意の歌とハーブでアントリオンの注意を引き付け、モアが持ち前のすばしこさで

敵の周囲をヒット＆アウェイで駆け抜ける。そして、ミルが唱えた水を操る魔法。

「スプライト・チェーン！」

ミルの杖から現れたのは大量の水を鎖状に固めたリーチの長い鞭だった。それでアントリオンの後頭部を続けざまに五連打する。その間アントリオンは身動き一つできずに硬い体を丸めて縮こまっているだけだった。

「アイス・バースト！」

とどめは連続で放ったミルの魔法。上空で固めた冷気を破裂させて氷の粒を降らせる魔法だ。落下することで鋭さを増した氷はアントリオンの硬い体を難なく貫いたのだ。

「やったね！」

モアは止めをさしたミルに向かって大きくブイサインをした。ミルも嬉しそうにブイサインを妹に返す。最初の頃は魔法を使った後は戦闘の疲労もあいまってブイサインなどできなかったミルだったが、この頃はすこぶる順調である。

「これでいいですよね？」

ミルが確認のためにラスレンに聞くと、彼は「ええ」と優しく微笑んだ。

「後はダーウィンに報告に行くだけです。お二人ともお疲れ様でした」

「楽勝だよ、こんなの！」

モアは得意気に胸を張った。

「さあ、ではそんな元気があるうちに砂漠を抜けてしまいませんか」

「「おー！！！」」

ミルとモアはやる気満々に右手を空に振り上げるのだった。

第17話

ミルたちは今、切り立った崖の上に立つ大きな屋敷の前に立っていた。

「村の人が言っていた研究施設ってここなのかな？」

ミルは改めて崖の上に立つ屋敷を見上げた。外観は真下から浴びせられる塩を乗せた風にやられてすっかり寂れてしまい、屋敷の上のほうからはどこから生えてきたのか植物のつたも伸びている。

「間違いないでしょう。ここまでぼろぼろとは聞いていませんでした……」

「お化け屋敷みたいだね。ドキドキするなあ」

「私はお化け屋敷はちよつと……」

アビで屋敷の情報を聞いたときはミルのほうが楽しげにしていたのだが、いざその屋敷を目の当たりにしてすっかり気持ちが姉妹で逆転してしまったようだ。

「出るか出ないかは置いて入ってみましょうか。これだけ大きな屋敷なら魔法に関する書物の一冊くらいあるでしょう」

ラスレンに言われ、ミルはため息をつきながらモアは顔をほころばせながら屋敷の重い門を開けて中へと進んでいった。

厳しい土地に立つ研究屋敷は内観もこれでもかというくらいにぼろぼろに朽ち果てていた。屋敷全体を覆っている薄い霧に木でできた床は完全に腐り今にも床が抜けそうなくらいに柔らかい。所々穴が開いているのもきつとミルたち以前にここを訪れた冒険家たちが作ったものだろう。これでは研究屋敷というよりは本当にゴーストハウスと言ったほうが懸命なこの屋敷だが、見つけた書斎には数多くの種類の魔法所が無造作に並べられていた。

「すごい。古代魔法王国が全盛期の頃を記した本に、古代魔術の全貌、現代魔術の習得なんて本まである」

この部屋を見つけるまでは常に恐怖を顔に表していたミルだったが、

書斎に入った途端、本にすがりつくように棚を散策し始めた。さらにラスレンまでもが興味のある本を見つけたのかすっかり釘付けにされていた。

そんなに面白いのかと本のページを一ページめくってみると、モアには理解しがたい単語、文章、内容の三拍子がすぐにモアの読む気を消失させた。

「お姉ちゃんもラスレンもよくこんな字ばかりの本に夢中になれるなあ……」

ケティットにいた頃は学校にいる時間も含めてその大半を外で過ごしていたモアにはやはり読書の良さはよくわからないようだ（少しでも知識を多く仕入れてレスミールの魔法学校に入学しなくちゃ。そして……）

ミルには夢があった。彼女はこの旅を志願した当時からレスミールを訪れてアルスに会うことだけを目的にしてはいなかった。いつの日か、約束を果たすために一流魔法王国の魔術に触れて、アルスをサポートする魔導師になると。その為にはシュトレーン魔法学校だけの知識ではまったくもって足りない。得られるだけの知識を今ここで吸収して少しでも試験の結果に貢献させなければならなかった。

数時間が経過してもミルは一向に休む気配がなかった。ラスレンも流石に読み疲れたのか目の辺りを指で押さえながら休憩をしている。

「今日はここに泊まりですかね」

ラスレンの一言にモアがあらさまに嫌そうな顔をした。

「まあまあ、そんな顔をせずに。おそらく彼女には彼女なりの目的があるのでしょ」

「アル兄に会いにいくだけじゃないの？」

「さあ、どうでしょう」

ラスレンは意味深な笑みを浮かべると、席を立った。

「さあ、我々は夕飯の準備でもしておきましょう。まずは台所を探さなくてはね」

「はあゝい……」

モアはげんなりとした表情でラスレンの後をのろのろとついていった。

第18話

「エスパール、これをお願いね」

ミルはいつものように手紙の入った筒をエスパールの両足にしっかりと握らせると、その両手の中から彼を優しく空に放した。

「ミルさん、そろそろ出発しますよ」

向こうでテントを片付けているラスレンに声をかけられ、ミルはエスパールが飛び去っていった空から目を離した。

「今日は少し予定を変更します」

昨日の野営地から出発するなりラスレンは穏やかな笑みを浮かべながら言った。

「本来ならこのままアビを北に進みダーウエンに向かう森へと入っていくのですが、その途中のわき道に洞窟があるということなのでそこに向かいます」

「何か目的があるんですか？」

ミルの問いにラスレンは「いいえ」と首を振った。

「ただ、そろそろ僕たちがケティットを旅立ってから一ヶ月が経ちます。貴方たちの冒険家としての力量も上がってきたのでここから少し腕試しをしてみてもいいと思いますね」

「腕試し……？」

「洞窟というのは冒険家にとっては基本的なダンジョンの一つです。その中は道が枝分かれしていたり仕掛けを解いたりバリエーションが様々です。もちろん魔物も出てきます」

「そう言えば、これまでの旅で洞窟には入ったことがなかったね。」

「冒険家といえば洞窟だと思っていたからさ」

「でも、とても面白そう」

「決まりですね。まあ、お二人がもし嫌だと言っても縄をつけてでも行くつもりでしたがね」

「うひゃあ……」

「ラスレンって意外とそっちの属性の人だったんだねえ」

モアの一言にラスレンは「ご想像におまかせしますよ」とやはり優しい笑みを浮かべるだけだった。

アビの北西、ネクスス大陸の最西端に、その洞窟はぽっかりと口を開いてミルとモアの到着を待っていた。

「明かりは……ないみたいだね」

「じゃあ、ランプを使おうか」

ミルは袋からランプを取り出すと、炎の魔法で火をつけた。

「やっぱりこういう時に魔法を使えるのは便利だね」

「うん」

「じゃあ準備もできたし早速洞窟探検をして見ましょうか」

「「おー!!!」」

ミルとモアはやる気十分に右手を空に向かって振り上げた。

ランプを持つているモアを先頭に三人は洞窟の奥へと入っていった。独特の湿っぽさと蝙蝠系の魔物が多いことはいかにも洞窟といった感じた。しかし、ケティットから旅を始めて一ヶ月になるミルとモアにとってはもはやこの湿っぽさも、蝙蝠の羽音も気にならなかった。やがて三人は初めての分かれ道に遭遇する。

「道が分かれているね」

「どっちが正解なのかな？」

「私は右だと思うな」

「あたしは左だと思うー」

二人の視線が後ろに立っているラスレンに向けられる。ラスレンはやっぱりと言わんばかりに両者からの視線を浴びた。

「僕はミルさんに賛同します。まずは右に行ってみましょう」

「やったあ。ありがとうラスレンさん」

「ちえ、ラスレンったらお姉ちゃんに弱いんだからさ」

喜ぶミルとは逆にモアは可愛らしく頬を膨らませる。こういうアクシデントも女性二人と旅をする男の権限といえるだろう。

「もし右の道が分かれていても大丈夫ですよ。ちゃんとこの洞窟の

道は記録してありますから」

ラスレンは詩を書くときのノートを一ページ割いてそこに今まで通ってきた道を記していた。

その後も三人は順調に洞窟探検を行い、洞窟に入って三、四時間もする頃には全ての道が記された一枚の洞窟の全体図が出来上がっていた。

「ここで行き止まりだね」

「これを通ってきた道は全てですね」

ラスレンはノートに行き止まりを示す印を記入すると、ミルとモアにも確認のためにそのノートを見せた。

「な〜んか物足りなつたなあ」

洞窟の出口に向かって進みながらモアがつまらなさそうにつぶやいた。

「どうして？」

「だってさ、洞窟といえばもつと宝箱とか置いてあつて、つよい敵がいたりするものだと思っていたから拍子抜けしちゃった」

「確かに一般に伝わっている洞窟のイメージはそうでしょうね。しかし、実際はこんな感じの洞窟が多いですよ。トラップとか分かれ道とかも全て自然にできたものです。宝箱が置いてある洞窟は大抵がこのような自然の洞窟に人が手を加えた所謂人工洞窟です」

「そうなんだあ」

「天然の遺跡や洞窟はソグリアテス大陸に多く点在すると聞きますね。ネクシスはほとんどが人工洞窟です」

「あたし、一度でいいから宝箱を取ってみたかったなあ……」

「いいじゃないモアちゃん。分かれ道やトラップはいっぱいあったんだから」

なだめるようにミルは微笑んだ。

「まあね。途中、ひどい目に遭ったからね」

「それもまた一つの思い出ですよ。いい経験になりましたね」

「……そうだね。今回はこれでもいいか」

ようやくモアの気が晴れてきたところで洞窟の出口が見えてきた。外に出ると、空はすっかり星が輝く夜の世界に変わり果てていて、ミルとモアの目を奪った。

「明日も晴れだね、きっと」

満天の星空を仰ぎながらミルは優しくささやくのだった。

第19話

緑鮮やかな綺麗な森。木々の隙間から見える太陽は木の葉を受けて一層神秘的な色合いを秘めている。

小鳥のさえずりがあちこちから聞こえてきて森に入る者の気持ちに安らぎへと導く。

ミルたちはそんなネクス大陸で最も大きな森に入っていた。ただ、これだけ神秘的な森なのに名前が『深い森』なのには訳があった。森に入ったら最後、入った者は一生太陽の下に出ることができないという不気味な森なのだ。そして、一行も例外なく森の悪戯によって森の中をさまよい続けていた。

最初は森の神秘に心躍らせ、ついでに視線も躍らせていたミルとモアも一週間この森の中を歩いているせいか、そんな気力は完全に失せていた。

「ラスレンさん、これ…」

ミルが見つけたのは木につけられたナイフの傷跡。木には既に三つほど傷が横に軽く刻まれていた。

「また同じところのようですね」

今回ばかりはラスレンも微笑を忘れて険しい表情で木につけられた傷をため息を吐きながら見つめる。

「何なのこれえ！何でおんなじところをぐるぐる回ってばかりなのお！？」

まだ歩き始めて間もないというのにモアのつかれは最骨頂に達していた。それだけ精神的疲労のほうが大きいのだ。

「最初、この森の情報を聞いたときは単に森の規模のことかと思っ
ていましたが、どうやらそれだけではなかったようです。この罠こそがこの森が『深い森』と呼ばれる最大の理由……」

「つまり謎を解かないと出られないということですか？」

「おそらくはそうでしょう。しかし、謎を解こうにもこう木々に阻

まれてはどこに仕掛けがあるのかもわかりません」

「そんな、あたしここで死にたくないよ！」

モアが目には涙を溜めながら叫ぶ。そんな彼女を見ているとなぜだかミルまで涙が頬を伝っていく。アルスの笑った顔、怒った顔が次々と頭の中に浮かんでくる。

「森さん、聞いてください！私たちはただ、ソグリアテス大陸にいる幼なじみに会いに行くためにここを通り抜けようとしただけなんです！何も悪いことをしようなんて思ってません！だから、早くここから出してください！」

気がついたらミルは物言わぬ森に対してそう叫んでいた。なんと気の触れた行為だろうと思うだろう。しかし、人間というのは追い詰められると自然にすら命乞いを始めようと考えるのだ。

ミルが大声を張り上げたことで森を住処にしている小鳥たちが一斉に騒ぎ始める。

「な、なに！？」

モアもハッと顔を上げる。小鳥達のざわめきはやがて、一人の幽霊を呼び出してしまっていた。

足のないその存在にラスレンすら言葉を忘れて呆然とその場に立ち尽くすだけだった。

『貴方の言葉、それは本当なのかしら？』

美しい女性の姿をした幽霊はまるでミルたちの心に話しかけてくるようだった。

『答えて…』

「は、はい。私たちはレスミールにいる幼なじみに会いに行きたいだけなんです！」

『……………』

幽霊の女性はしばらくそのまま三人の前に立ち尽くしていたが、やがてふっと閉じていた瞳を開いた。

『貴方の幼なじみが見えたわ。どうやら本当のようね』

そして幽霊はすまなさそうに「ごめんなさい」と頭を下げた。

『この森は冒険家たちの間でも噂になっっているからもう誰も来ない
と思っていたの。そしたら貴方たちが入ってきたから。皆を守るた
めにこうして貴方たちの体力を奪っていいこうと思ったのよ』

「皆を守る？」

聞き返したミルに幽霊は小さく頷いた。

『私も昔は冒険家だったんだけど、この森で命を落としてね。幽霊
になって行き場のなかった私をこの森の動物達が拾ってくれて一緒
に暮らしていたの。以来、そのお礼として彼らを守ろうとこの森に
結界を張ったの』

「それが、入った者を迷わせる罠だったんですね？」

ラスレンの言葉に幽霊は小さく頷いた。

「幽霊さんはそれほどこの森に感謝しているんだ」

幽霊は微笑を浮かべながら小さく頷いた。

「でも、ここで死んだんでしょ？この森が憎いつて思わなかったの
？」

『うん。貴方たちも冒険家ならわかると思うけど、死は自分の油
断から招くもの。この森で私が死んだのは私に力がなかったから。
自分の慢心と油断のせいだもの。この森は何も悪くない。なのに、
この森は私を救ってくれた。これでどうして憎いなんて言える？』

「…貴方は強い人ですね。わかっていてもなかなかそうは思えない
ものですよ？」

『ありがとう。さあ、森の結界を解除したわ。このまま真っ直ぐ行
くとこの森を出られるわ』

「ありがとう、幽霊さん！」

『早く幼なじみに会えるといいわね』

「うん！」

ミルは大きく頷いた。

森を出た三人はダーウエンに向かう道を歩いていた。

「何か変な体験だったね」

「うん。でも、とってもいい人だったよ」

「彼女にとって、あの森はとても居心地のよい場所なのでしょうね」

三人はもう一度、後ろ降り返った。森は夕方の太陽の光を浴びて鮮やかなオレンジ色に染まっていた。

「また来たいね」

寂しそうにつぶやくミルにラスレンの手がそっと彼女の肩の上に乗せられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0040b/>

思い描くあの頃へ

2010年10月18日15時49分発行